



Data 2021-155
監督・脚本：濱口竜介
出演：占部房子／河井青葉

👁️👁️ みどころ

第3話は『偶然と想像』という統一タイトルにもっともふさわしい脚本で、『もう一度』というタイトルも意味シン！

20年ぶりの同窓会にもかかわらず盛り上がらなかったのは一体なぜ？そんな思いの帰り道、上下のエスカレーターで偶然再会した人は？もっとも、自宅を訪れ、おしゃべりが弾んだ後、「本当のことを言うと、私あなたの名前を思い出せなくて」と言われたら・・・。

“偶然”の反対語は“必然”のはずだが、“偶然”から生まれてくる自由な“想像”は一体どこまで広がるの？そんな演出にこだわった2人の女ゴコロの中は・・・？



■□■同窓会は20年ぶり！しかし・・・■□■

高校の同窓会で同級生に会うのは20年ぶり。そりゃ、さぞかし楽しいことだろう。さぞ、懐かしいことだろう。同級生との会話も弾んだことだろう。そう思ったが、本作冒頭の展開はそれとは正反対だ。

わざわざ仙台まで帰郷した、元ITエンジニアの夏子（占部房子）は、複雑な気持ちで仙台駅の上りのエスカレーターに乗っていた。すると、反対側（下り）のエスカレーターですれ違った女性、あや（河井青葉）を発見したから、びっくり！2人の再会は20年ぶりだ。そんな“偶然”から2人は近くにあるというあやの自宅でお茶をすることになったのはある意味必然だが・・・

■□■この再会に、そして、この会話にびっくり！？■□■

『逃げた女』（20年）（『シネマ49』341頁）や、『オー！スジョン』（00年）（『シ

ネマ49』350頁)等の韓国のホン・サンス監督作品では、女性たちの会話が常に登場する。そして、その中身は本質的かつ意味のある会話もあるが、たわいもない単なるおしゃべりもある。しかして、一戸建ての家に住み、夫と子供と共に平和な生活をしているあやとの間でひとしきりの会話を終えた夏子は、「あなたは、さっきから大事なことをなにも話そうとしない。20年ぶりに会ったのに。あなたは今幸せ？」と切り出したから面白い。20年ぶりの”偶然”の再会の場で、なぜここまで本質的かつ意味のある会話になるの？さらに、夏子は「同窓会にはあなたに会いに来たのよ」と言うから、びっくり！それは一体どういう意味？かつて2人の間には何があったの？そう思わせるに十分なセリフだが・・・。

ところが、その会話を遮るかのように、あやは「本当のことを言うと、私あなたの名前を思い出せなくて」と切り返したから、ビックリ。これまでの会話は一体何だったの？どうも、この2人は出身校も違う全くの他人で、あやは、夏子がずっと会いたがっていたその人、ミカではなかったらしいが、そんな間違いって、ホントにあるの？

■□■夏子とミカは恋人同士だったの？これは興味津々！■□■

あなたとミカさんは恋人同士だったんですか？女同士の会話の中で登場するそんな微妙な質問に、男の私はびっくりだが、それに率直に答える夏子の姿にもびっくり！夏子の話によると、①大学を卒業した後東京で一緒に暮らすと約束をしていた、②しかし、ミカの心変わりではそれは叶わず、それっきり会っていなかった、そして③夏子は、どうしてもあやにミカをかさねてしまうらしい。男同士の政治談議や、経済談議はさまざまな場面でたびたび登場するが、本作品で濱口監督が設定した“偶然”から、女同士の会話がこんな微妙な会話に発展するのは稀有なこと。まさに、『偶然と想像』という総合タイトルにふさわしい内容の第3話だ。

そこでさらにビックリさせられたのは、あやが「もしよかったら、私がミカさんをやるか？」と提案してきたこと。しかも、夏子はあやの提案通り、まるでミカがそこにいるかのように、「何をしても埋まらないような穴がきつと空いているはず。それを埋めることはもうできないけど、私にもそれがあって伝えに来たの。その穴を通じて、私たちは今も繋がっているかもしれないって。」と話してきたからすごい。

もし夏子とミカが恋人同士だったとしたら、20年後の今、偶然の再会から、夏子とミカの代役としてのあやが再び恋人同士に・・・？これはかなりヤバそうな展開だが、そこであやの息子が帰宅してきたことによって、2人の会話は中断してしまうことに・・・。

■□■あやは夏子に誰を重ねたの？夏子の提案は？■□■

本作はすべて会話劇で成り立っているが、第1話、第2話以上に第3話は会話の展開が読めない。偶然と必然なら物事はそれなりに考えやすいが、本作は偶然と想像だから濱口

監督の想像がどこに広がってゆくのかは想像がつかない。したがってそこで展開される会話劇も想像がつかないわけだ。しかし、出身高校も違う全くの他人である夏子とあやの2人があそこまで会話を合わせていたのは一体なぜ？

その理由は、夏子があやにかつての恋人ミカを重ねていたのなら、逆にあやのほうだって……。そう考えた夏子は仙台駅への帰り道、見送ってくれるあやに、自分と間違えた人物について尋ねると、あやも夏子にあるクラスメイトの姿を重ねていたことを告白したから、びっくり！濱口監督の想像は際限なく広がっていくものだ。

しかして、仙台駅のペレストリアンデッキで、本作前半に登場した印象深いエスカレーターシーンを再現するかのように、2人はそこである劇(?)を演じ始めたが、そのころは？あやのかつてのクラスメイト役を演じた夏子につきあっていたあやはそこで「なんにでもなれたはずだったのに、気が付けば時間だけが経ってしまった」「心燃え立つものが、もう、なにもないの」と心の中を打ち明けたが、さて、その後の展開は？それは想像を絶するものだし、本作を見ての最後のお楽しみだから、それはあなた自身の目でしっかりと！

2022（令和4）年1月25日記